

の使用・廃棄と礫群の形成には何らかの関係があったと考えられる。特に使用痕の確認率の高いエンド・スクレイパーの分布は、複数の礫集中の形成に強い位置的关系性が認められる。エンド・スクレイパーを含めたツールは受熱率が極めて低いことから、維持・廃棄の面で剥片類とは区別された可能性が高い。さらに、調査区中央部の礫群と北東隅の礫群では周辺に分布する石器の器種構成と被加工物の内容が異なっている。

剥片類やツール、礫群の分布と接合関係、石器の使用の状況から、上ミ野A遺跡で行われた諸活動は礫群を中心になされていたと考えられる。石器の使用の面では、便宜的ともいえる剥片の使用や、礫集中をとりまくツールの分布状況が特徴としてあげられる。エンド・スクレイパーには軽度ではあるが、50%を超える高い率で使用痕が認められ、礫群との間にも一定の位置的关系性がとらえられる。また、礫群に伴う火の使用とそれを可能にするだけの一定の滞在期間があったと推定される。そのような状況の中で、上ミ野A遺跡では、多くの使用痕が認められないツールがありながら、あえて剥片類を使用している状況が確認された。

使用された剥片には皮なめしを行ったと推定されるものがありながら、それ以外にも皮なめしに使用されたと推定される多くのエンド・スクレイパーが出土している。その相反する特徴は、廃棄を考える上で大きなヒントとなる。①剥片までも利用して皮なめし作業を行ったという解釈と、②剥片を利用することでエンド・スクレイパーの使用を軽度に留めたという解釈、そして③他の場所で使用されたエンド・スクレイパーが礫群の形成に伴って一定の位置関係をもって残されたという解釈の3つが想定できる。①②の解釈を裏づける要素は十分にあるが、ふたつの礫群間の器種構成や使用痕の状況の対称性を重視すれば③の可能性は低く、上ミ野A遺跡では、石器の使用とそれに伴う遺棄・廃棄行動があったと推定される。

第4節 上ミ野A遺跡の調査成果からみた旧石器人の行動連鎖

上ミ野A遺跡の発掘調査により、東北地方では初めてAT火山灰と十和田八戸火山灰に挟まれた包含層から石器群を検出することに成功した。層位的調査事例のさわめて少ない東北地方日本海側では画期的な調査となった。このことは当該地域においても詳細な層位観察と火山灰分析を行うことで、広域火山灰の検出が可能であることを示し、後期旧石器の層位的編年研究の可能性を示すものになったのである。しかしながら、上ミ野A遺跡第2次調査以後、このような広域火山灰に挟まれた後期旧石器時代文化層の検出例はなお皆無である。これは東北地方の旧石器時代遺跡調査例が少ないこともあるが、広域火山灰堆積の認められる遺跡がかなり限定されることを示している。

東北地方の後期旧石器研究は層位的出土に恵まれないという弱点を克服するために、型式学的方法によっていくつかの編年案が提示されてきた。しかし、そうした取り組みは石器型式の進歩または退化といった理論の上に成立するもので、その編年的な解釈はあいまいな基準によって成り立っていた。したがって、決定的な編年観に達することはできなかった。他地域の資料との比較という検証方法が必ずしも十分には成立しなかった。それは、東北地方が頁岩原産地にあることから、層位的編年の確立した関東地方と関連付けるには、石材の相違と空間的間隙を埋める必要があったからである。茨城・栃木・福島県の後期旧石器研究の進展が徐々にそれを可能にしつつあるが、直接の比較にはまだいくつかの課題を乗り越えなくてはならない。そのひとつに、石材の特質を石器製作技術はどのように克服しているのかという問題がある。石材を越えた石器型式学がどれほど有効かという実

証研究にまだ結論は得られていない。

一方で、東北地方の旧石器遺跡は恵まれた石材環境により石器製作技術研究のために多くの良好な接合資料を提供してきた。接合資料による実証的な石器製作技術研究の蓄積があり、石器製作技術を単純に模式化せずに、実体論の中で議論を展開してきた。その延長線上で、石器製作を行う遺跡と行わない遺跡の存在が明らかになり、遺跡と遺跡を繋いで考える視点が生まれてきた（会田 1993、2001）。大きな石材は大きな石器を製作できだけでなく、同じ原石を長く保持することが可能である。そこには頁岩の石器製作に適した性質だけでなく、道具素材としての潜在的有効性が内包されている。頁岩が遠隔地でも認められる理由には質の良さだけでなく、良好な材質の道具素材を長く保持できることの有利さがある。その利点は移動先の環境のもとで、石器に適した石材を探し、補充するという行動を省略できる点なのである。

頁岩という石材は石器製作に適した石材ではあるが、その石質を理解せずに、他の石材と同様に石器製作をおこなうことはできない。黒曜石には黒曜石の、サヌカイトにはサヌカイトの扱い方があり、頁岩にもその石材の扱い方がある。それを熟知した製作者とそうでない製作者では原石の採取からその処理過程が異なるのである。石器製作技術とは最終的に石器の形を作り出すだけのものではなく、無数の原石から選択し、そしてその割り処理過程を見通した利用計画までも含んだ行動の連続なのである。それがどのような実態かを、個々の遺跡で把握する方法が石器製作を通した行動連鎖研究にはかならない。人類の行動は融通性に富みながら、方向性が定まっている。それぞれの遺跡はそれらの行動連鎖の断面であり、それまでの行動の集積でもある。そこまでの行動を整理することで、次の行動の予測も可能になる。

上ミ野A遺跡では石器製作行動だけでなく、礫群の使用・廃棄行動の復原により、後期旧石器人の行動の多様な側面を明らかにした。また、上ミ野A遺跡の母岩別分類、接合資料による剥片剥離技術分析と石器属性分析により、石器素材が遺跡内で剥離された剥片とは異なる形状であったことが明らかになった。母岩2は多くのツールと石核を含んでいるが接合しない。石核の中には石刃核（第33図版107）もあり、状況によっては石刃剥離も行っていた。上ミ野A遺跡に到る以前の遺跡で原石が分割され、剥片剥離が行われ、その剥片を素材としてそこでナイフ形石器やエンドスクレイパーなどのツールに加工されたのである。旧石器人は上ミ野A遺跡に加工された石器（ツール）と石核を携えてやってきたと推定される。上ミ野Aで母岩2の石核は剥片剥離を行っているが、その剥片はツールに加工されていない。その剥片はほかの使用痕ある剥片と同様、簡単な作業に便宜的な道具として使われたのであろう。この事実は、剥片剥離の様相が連続した行動の連鎖上にある遺跡によって、異なることを示している。これが上ミ野A旧石器人の頁岩という石材の扱い方の一断面なのである。横長剥片素材のナイフ形石器（第16図版14、第17図版15）の存在や、凝灰岩製のナイフ形石器（第16図版13）の保持状況は、頁岩地帯以外の石材環境における彼らの行動の多様性をほのめかすものでもある。そういう意味で石刃石器群とは根本的な技術行動で一線を画するものと考えられる。上ミ野A遺跡を経由して、頁岩の補給がない環境下では、彼らの保持する石器群の様相は上ミ野A遺跡とまた異なった姿となるであろう。

石器製作技術の実証的研究は遺跡間比較を介在させることで、人類の行動連鎖研究へとつながってゆく。従来の規範的な石器文化を復原する方向もひとつの研究方法であるし、人類の行動を実証的に復原するのもひとつの方法である。今後、これらの研究が実証的にさらに発展することが期待される。